

# 「日本人妻と生きる」

—在日朝鮮人の生活記録

金 一勉

# 妻と生きる」

鮮人の生活記録

金 一勉

金 一 勉 (キム・イルメン)

1921年 朝鮮・晋州に生まれる

現 在 評論家

著 書 『朴烈』(合同出版)

『日朝関係の視角』(ダイヤモンド社)

『日本人と朝鮮人』(三一書房)

『天皇の軍隊と朝鮮人慰安婦』(三一書房)

『1945年の原点』(三一書房)

『朝鮮人がなぜ「日本名」を名のるのか』(三一書房)

現住所 埼玉県川越市寺尾643

## 日本人妻と生きる

1979年 6 月 30 日 第1版第1刷発行

著 者 金 一 勉  
©1979年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 文栄印刷株式会社

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 9-84160 番

郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

## はじめに

歴史のひと足は、二〇年や三〇年をひと跨ぎにしてしまふ。一九四五年〜五〇年のことが、つい一〇年前の出来事のように私にはありありと浮かんでくる。

過ぎし歳月は連続的なものだが、不思議なことに一九四五年八月以前のことは遠い昔の出来事のように思われ、それ以後のことは微細なことまで記憶に残って、生き生きと新鮮に想い出されてくる。

一九四五年の真夏——長い歳月にわたる辛苦の中で闘いつづけて、待望した朝鮮の「解放」が突如とやってきた。△青天霹靂▽という語が頻繁に用いられた。解放民族となった私達は、失われたものを取り戻すべく何かとソワソワしながら、あせり始めた。まず、わが本名を名乗り、それから日常の朝鮮語を、埋もれかけた朝鮮歴史書を、懸命にあさり始めていた。

その年の秋から冬にかけて多くの同胞が、我先にと蘇った故国への道をあせった。北海道から集団帰国の特別列車が博多へと走っていたが、それをも待ちきれずに多くの人々がヤミ船を雇って海を渡っていた。ひと足早く帰った方が有利だったからである。

そんな慌しい中で、私には一つの気懸りがあった。それは、紳のできたばかりの日本人の妻の存在であった。日本帝国から解放されたばかりの故国では、日本人妻を歓迎しないばかりか入籍前の配偶者は強制的に日本へ送り返すという状況だったからである。そんなこともあってマゴマゴしているうちに一年が経ってしまった。

朝鮮解放の翌年（四六年）になると、還るべき故郷の南朝鮮の同胞が、日本への逆流現象を見せはじめた。解放の

歓喜に沸き上がったはずの故国を、しかも妻子まで置き去りにして敗戦日本の地へ渡ってくるからには、よほどの  
△異変▽が起きているにちがいないと察するようになった。当時、一切の通信手段はなく、ただ逆流してきた人々の  
口を通じて、その異変状況を知るのみであった。

それによると——旧日本軍の武装解除の名目でやってきたはずの米軍がベトナム師団を發揮し、新たな主人顔をし  
てのしかかった、ということだった。当初、南朝鮮では「人民共和国」が成立して念願の政治が発効したのであった  
が、米軍はそれを敵視して蹴っ散らし、占領地なみの軍政府を設けて旧総督府の官憲を駆使したので、全土が蜂の巣  
を突いた混乱状態に陥った、というのであった。

そこで、在日朝鮮人の多くは「もう少し故国の形勢を見てから……」といった日和見を抱くようになった。従って  
私達は、浮足立った身であり、尻の落ち着かない、中途半端な暮らしを余儀なくされた。とはいえ、「生きる」の  
に、あやふやな中途半端は許されない。

敗戦日本の、さまざまな混乱騒ぎの中で、尻の落ち着かない中途半端な生き方の境遇は、あらたな茨と言わねばな  
らない。敗戦国の巷に極度の食糧難、住宅難、目まぐるしいインフレ、あらゆる混乱が起きつつあった。

だが今や、れっきとした「外国人」になった朝鮮人は、旧態のままに日本の地に匍匐した生き方をすることもできな  
くなった。まず、日本人と同じく就業することが難しくなった。海外から引揚げてきた多くの日本人自身、就職難で  
喘いでいた。

南朝鮮の混乱騒ぎの渦中に、私はひそかに、もうすこし日本に住み続けて勉強を積みたいと考えた。私らの世代  
は、とかく「一人三役」を負いがちであった。失われた歳月を挽回するために向学心に燃えていたし、一方では社会  
人として組織に参加してスクラムを組まなければならない。そして一家の生計を支えなくてはならない身であり、文  
字どおり東奔西走の身であった。

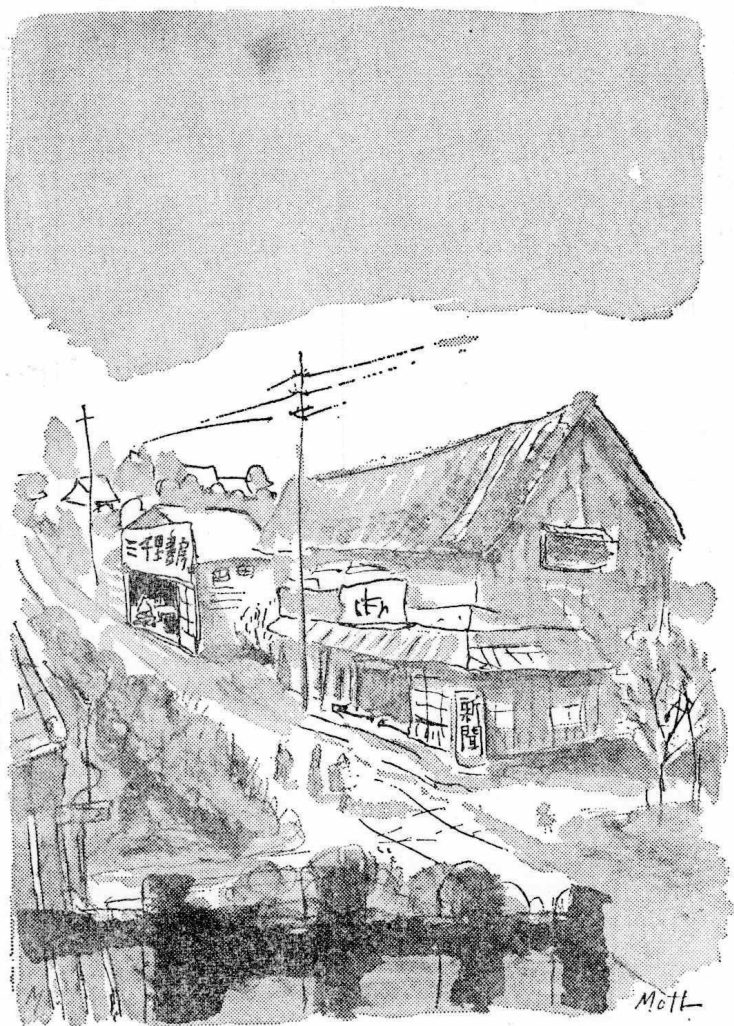
私は、その「一人三役」を生きぬこうと、アクセクして小さな家を建て、古本屋を始めてみた。万事が自力でやら  
なければならなかったので、その家を担保に入れて高利貸しの金を借りて出発した。だが、混乱と荒波の世相は、青

二才の甘い胸算用どおりにはさせなかった。

この記録は、当時の私の夢中に生きぬこうとした、なまなましい生きざまである。



日本人妻と生きる／目次



はじめに

1

第一章 古本屋開業

11

Ⅰ 三千里書房のたたずまい 12

Ⅱ 古本の売り買い譚 25

Ⅲ ブローカーの買占め 33

Ⅳ 素人商売の悲哀 41

Ⅴ 退屈な店番の回想 47

第二章 店閉まいのてんまつ

55

Ⅰ 夜明けの独語 56

Ⅱ かなしき葛藤 65

Ⅲ 「女」の十字架 73

Ⅳ 妻の決意 80

第三章 東京から岩手の地へ

91

Ⅰ 上野駅の離別 92

Ⅱ 子連れ女の里帰りは辛いもの 102

Ⅲ 農家の手伝いと栗拾い 107

第四章 朝鮮学校の教師になる 119

Ⅰ 家売って金融業者に投資 120

Ⅱ 足立の朝鮮学校教師 129

Ⅲ 妻の一時の帰京 140

Ⅳ 魂のぬけた教師 153

第五章 流転 161

Ⅰ 「金」に憑かれた人たち 162

Ⅱ 金融ブローカーの素顔と結末 170

Ⅲ 荒川の朝鮮人学校のころ 179

第六章 幼女と共に生きる 187

Ⅰ 一人ぼっちの秋チャン 188

Ⅱ 御殿町の朝鮮学校と同胞たち 195

Ⅲ 風雲と嵐の前夜に 201

あとがき 211

装幀・及部克人  
扉絵・田島泉男

日本人妻と生きる

——在日朝鮮人の生活記録



第一章 古本屋開業



## I 三千里書房のたたずまい

わたしの古本屋は、東京・練馬区小竹町のぼんやりした商店ならびのはずれであり、そこからは住宅の生垣が繁っていた。

戦後急場しのぎのしきたりや中二階のバラックを建て、階下の土間に本棚をつくり、赤っほい大衆読物を並べた。貧困な世相とはいえ、いじらしい店だった。店を開いたとき、母に手をひかれた少女が、珍しいものを発見したように「こんなところに本屋ができたよ」と声をあげて通った。

そんな辺鄙な場所に、小っぼけな古本屋をつくったのも、私の地味な性格をよく現わしている。いたるところに喧騒の闇市と、すさまじいインフレ、社会不安、占領下の政局は一日刻みに揺れ動き、生活物資は窮乏のどん底の世相にあって、私らしい用心深さとアクセクスの姿だった。日本の戦争が終って三年——住宅難と企業難と就職難のさなかで、私など容易に職にありつけない時勢で

あった。

古本屋を開いた日、私らの手もとには一〇〇円のお金さえなかった。店を開いたといっても店の本棚はがらん洞であり、ただ「ここに古本屋を始めましたから、どうぞ宜しく……」といった意味で戸を開けたにすぎない。店の本棚に古ぼけた雑誌類と我楽多のような大衆読物を一〇〇冊ほど並べただけであった。それでも、本屋だともると通りがかりの客が近づいて、何か珍しい本はないかと、軒先に立って店内を見まわしたりした。だが大部分の客は八なあんだ、おめえ客を馬鹿にしているぞ」と言いたげに、ぶいと背中を見せて立去った。

私の建てた住宅兼古本屋は、木っ端ぶき屋根に柱と外見板で囲っただけの家であった。それに台所もなく、便所の戸もつかないままである。私が金を払えそうもないことを見越した大工が、中途で投げやりにしたからである。

当初、私は、戦時中からの蔵書八〇〇冊を元手にするつもりであったのだが、大工賃に追われて、それを他所の古本屋に売払ってしまったのだ。だから私らの古本屋は初めから素手で始まった。私の了簡では、家さえ建てておけば、あとはどうにかなるだろう、この家を担保に

してお金を借りて本を仕入れることもできる、と思った。だが息が切れて、中途半端な家になってしまったし、そこへ一家三人が住みつくことになった。東京の到る処で掘つ立小屋や防空壕に住んだ人々がザラにあった。まっとうな家族が半乞食みたいになって上野の地下道あたりにもシロを敷いて寝起きしていた時節であったから、どうということもないのである。

私が、その家を建てるまでの間、妻の岩田富江は田舎の実家に身を寄せて不安な暮しをしていた。東京は焼野原が多くて住宅難・食糧難の混乱のさなかで、誰しも、田舎へ疎開した家族を呼び寄せることができなかった。たとえ都内に住家があるとしても、食糧配給が保証できないとして、都内への転入を制限して、都内への入転入証明書Vを発給するほどだった。敗戦から教年間、東京の旧市内(二三区)では、一〇〇万人を抱えるのが精いっぱいと言われた。

その頃、私は板橋区茂呂町の畑にかこまれた一軒家の「玄関三畳間」に間借りして暮らし、夜学へ通っていた。それに敗戦後の混乱のさなかに、赤ん坊が産まれていた。だが、その母子ともに籍にも入れられなかったまに事実として「妻」となった岩田富江は赤子を抱え

て、東北の片田舎の実家に住みついて二年半が経っていた。だが、その間に生活費らしいものを送らなかつた。

田舎の実家といっても田畑を耕す農家でもなく、裕福でもない。そこへ旧満州から引揚げてきた弟たち三人がごろごろしていたので家じゅうが狭苦しく、子連れの彼女は肩身の狭い思いをした。そこへ、赤ん坊が中耳炎を患って医者通いをした。東京の私から一円の仕送りもなかったわけだから、さすがの親からも「どこさ見えない所へ行んでくれ」となじられた。なじられた彼女は、小学生の弟の雑記帳をやぶいて鉛筆の走り書きで私宛に手紙を書いた。その切手代にも困ったのである。

そのころは解放民族になって歓声にあふれた、戦時中の強制連行の朝鮮人が北海道や青森方面から集団的に故国へ引揚げていた。その専用列車を連日、彼女は見かけていた。それで、もしや私も、こっそりと帰国するのではないかと気を探んで、五日と間を置かずに私宛に便りをよこした。その、たどたどしい鉛筆の便りを読んでいるうちに、私は膝の崩れるような感傷に浸ったものである。とかく青年にとって「感傷」とは、良心的に忠実に生きること——そんなタテマエの声にあふられるように思われる。

その岩田富江の類々な便りには、埃っぽい片田舎の生身の切実さが並べられていた。「いまごろ東京の貴方も、苦しいでしょうが、なんとかして、今すぐにも、いくらかでもよいですから、金を送っていただけませんか。お金を持たないと、もう死んだのと同様なことです……」とあり、「苦しくなったら、子供と二人で死んでしまいます」とも書いてあった。

私は、そんな手紙を懐にねじこんで職を求めて東京中をほろつき歩いた。俗に「犬も歩けば棒にあたる」のとえ、足を棒にしながらか職を探し求めた。が、東京は焼けビルの砂漠を思わせ、どこも痩せ細って、物欲に溢れ、リュックを背負って競々とした群がうごめいて、私などのつけ込む余地はなかった。どこを尋ねても無駄足であった。歩き疲れると、道端に取残された水道の水を飲み、くたびれきったポロ靴をひきずって帰ってきた。敗戦日本の巷に、失業者があふれて、毎日のように海外からの日本人が引揚げていた。こうなると、日本の政治社会から離れて独立民族となった朝鮮人を、なにかと「余計者」のように見がちであった。

そこで私は、今度は気の進まないままにアメリカ進駐軍の施設関係を探っていた。日本人の会社ではなく米

軍の施設ならば間違いない就職できるだろうと、職業安定所の紹介状をもってたずねていった。そのころ、連日のように新聞広告に「進駐軍施設要員募集」が掲載された。たとえば通訳、タイピスト、大工、左官、トラック運転手、塗装工、調理師、守衛、家庭教師、事務員——ありとあらゆる職種が含まれていた（あとでわかったことだが、日本全国での進駐軍施設の要員は五十数万人になるといふ）。

敗戦日本の街々には、背が高く鼻の尖った白人兵がパイプをくわえてジープに跨って疾走し、「パンパン」と呼ばれる「夜の女」があふれて、日本中は直接・間接的に「進駐軍経済社会」ともいふべき状況にあった。日本は戦争に敗れて被占領国となったが、軍政ではなく日本政府を通じての間接統治である。多くの占領軍兵士が巷に満ちあふれ、その家族たちもやってきて、その生活模様は別世界のようであった。東京中が停電つづきでロウソクの灯をともしひもじい夜をすごしたが、占領兵士の宿舎は不夜城のように輝きつづけた。それに日本の為政者は日本の敗戦を「終戦」と称し、占領軍のことを「進駐軍」と呼び交わしていた。

さて、私が尋ねていった進駐軍の施設にも、正門の守